

# 宗方小太郎日記補足、明治 28 年 3 月 23 日～9 月 1 日

大里 浩秋

## 1. はじめに

本所報 No. 37 に宗方小太郎の明治 21 年の日記（但し中国滞在時期のもののみ）を載せ、No. 40 に 22～25 年、No. 41 に 26～29 年（但し、27 年 6 月 27 日から 12 月末までと、28 年 3 月 23 日から 8 月末までを除く）、No. 44 に 30～31 年、No. 46 に 32～33 年、No. 47 に 34～35 年、No. 48 に 36～38 年、No. 49 に 39～40 年、No. 50 に 41～42 年、No. 52 に 43～44 年（但し 43 年の欧米旅行時期を除く）、No. 54 に 45～大正 2 年、No. 55 に 3～4 年、No. 56 に 5～6 年、No. 57 に 7～8 年、No. 58 に 9～10 年、No. 59 に 11～12 年（但し 12 年は、宗方が亡くなる 18 日前の 1 月 15 日まで）、さらに、No. 62 に補足として明治 27 年 6 月 30 日～12 月の日記を載せた。以上の日記は、すべて上海社会科学院歴史研究所が保管しており、それらを利用して解読し解題を加えたものである。

さて、今号では、同じ宗方小太郎の日記ではあるが、国立国会図書館所蔵の「澎湖島従軍日記」と「台湾従軍日記」を取り上げて、解読と解題を試みる。両日記とも、解読文がすでに『宗方小太郎文書—近代中国秘録』（神谷正男編、原書房、1976 年）に収録されているが、遅まきながらも私の解読と解題を公表する意味はあるだろうと考えてのことである。

なお、前回までと同じであるが、お断りすべきことを記す。原文のカタカナはひらがなに改め、漢字の旧字体は新字体に改め、適宜句読点を加えたが、日本人の名前の漢字はそのままにした。私が付す解題中での扱いも同様である。また、解読できなかった字は一字につき□一個を付した他、解読上補うか訂正した方がいいと判断した字を〔 〕内に加えた。

## 2. 明治 28 年 3 月 23 日から 9 月 1 日までの日記

宗方の日清戦争への直接の関わりは、明治 27 年 6 月末に戦争勃発直前の清国軍の動きを偵察する使命を帯びて山東省芝罘に向かうことに始まるが、その時から同年中の日記は本所報 No. 62 を、28 年 1 月から 3 月 22 日までと同年 9 月 1 日以降の日記については No. 41 を読んでいただければ幸いである。そこでここでは、朝鮮半島・黃海・中国大陸における戦闘を経て日本軍の勝利が決定的になった時点で澎湖島と台湾島における戦闘が組まれた意図について、原田敬一『日清戦争』、吉川弘文館、2008 年を参照しつつ簡単に見、さらに、上述の偵察任務を終えて明治 27 年 9 月に帰国してから両島に出かける前の宗方の動きを確認し、その後に両日記の内容に触ることにする。

まず、台湾の割譲については早くに考えられており、陸軍参謀本部が明治 20 (1887) 年にまとめた「清国征討策案」には、戦争勝利の後に「本邦の版図に属させる地域」として 6 か所をあげた中に、澎湖島と台湾島を含んでいた。そして、日清戦争展開の過程で伊藤博文首相は、講和条件としての台湾割

譲を想定して 27 年 12 月に台湾攻略作戦を大本営に提案しており、翌年 1 月には台湾攻略戦の前提として「澎湖列島攻略作戦計画」が策定されているのであり、そして、その後講和のための清国全権として李鴻章が任命されて正式交渉が開始することになるが、それまでに台湾島占領の既成事実を作つておくことが求められ、強引にでもその作戦を進めることになった。

以下には、27 年 9 月に帰国してすぐに広島に向つてから澎湖島作戦に参加するまでの宗方の動きを確認する。彼は広島に設置されていた大本営に出仕、海軍嘱託としての活動に従事しており、台湾攻略の意見書を書いたり、通訳官の選考に関わったりし、「対清邇言」を書いて海軍部に提出している。「対清邇言」の内容は、今回の戦争を今後いかに展開させるべきかを論じ、有利に進めてきた戦争の終結を間近にして清国側に認めさせるべき条件をいくつか指摘しているもので、その文中に「盛京省の沿海部、山東、江蘇の一部及台湾全島を永く我国に割譲せしむる事」の表現もあった。

彼の日記は、その日に会つた人の名前を記し受け取つた手紙や出した手紙についても相手の名前を書いていることが多いが、この時期においてもそうであり、上海であるいは出身地の熊本で顔を合わせていた人物が広島に訪ねてきているし、手紙を盛んにやり取りしていることがわかる。訪ねてきた人のほとんどはこれから出征すべく宗方と別れを惜しんでいるのであり、周囲に日清戦争に通訳その他の内容で関わる者が多数いたことを彼の日記から知ることになる。

28 年 3 月 5 日に聯合艦隊付の派遣が発令され、準備費 50 円支度金 15 円を受けとり、8 日に宇品港を出発、15 日に佐世保を出て一路澎湖島を目指して進んだ。当初 20 日を総攻撃の日と決めたが、悪天候のため延期、天気が良ければ明日攻撃という 22 日の夜、宗方は澎湖占領後に設置する「民政府に関する意見の要点を記し、安原參謀に贈」った。今回の澎湖島攻撃で彼に課せられた任務は、占領後に始まる宣撫工作にあつたことをうかがわせる。

さて、澎湖島への総攻撃が始まる 3 月 23 日からの日記は小型の手帳に鉛筆書きしたもので、ふだんの日記が B4 版の白紙あるいは罫線の入つた用紙に毛筆で書いているのとは趣を異にしている。といつても、ふだんでもとくに旅先での観察記録はまずはメモを取つておき、それを見ながらまとめて B4 版に写し直すという方法をとつてゐたようであるから、この時もまず手帳に書いていづれ従来のスタイルに書き直すつもりだったのかもしれない。しかし忙しいためかそうはしないで、同年 5 月 9 日までの分が「澎湖島従軍日記」、5 月 9 日から 9 月 1 日までの分が別の手帳に「台湾従軍日記」と題して残つたのである。

「澎湖島従軍日記」によると、3 月 23 日の総攻撃ではほぼ相手を制圧し、翌 24 日までに戦闘は終つたとするが、艦船上からそれを見ていた宗方は、23 日の日記におおよそ次のような感慨を記している。「今夜始めて遠征しているとの感情が沸いた。きょう始めて砲煙弾雨の中に身を置いて、私の肝つ玉の程度では、平生の愉快なことが何よりだと知つた。」宗方は伊東司令長官のお供をして、24 日朝に上陸し、26 日の日記には「予輩の上陸するや土民総代來り保護を哀求す。語言通ぜざるを以て仁義の師たるを書して与ふ」と書いている。

ところで、彼が日記に繰り返し記しているのは、戦死者に比べて圧倒的に多い病死者についてである。この事実は多くの記録で明らかになっていることであるが、武器の絶対的な優勢を誇る戦闘ゆえに戦死者は少なく、それに比して異地での健康管理に無防備だったゆえにコレラによる死亡が目立つたということに改めて気づかされる。4 月 1 日には「民政府へ建議書を作」り、5 日には民家に「我軍之告示」を貼らせた。内容は「大日本國皇帝倡義討賊不害順民、從今三十六島永為日本屬邦云々」であった。澎湖島滞在中時折下関での講和会議の情報を聞いていて、仮条約が 17 日に結ばれたことは 25 日の日記に記している。

以後 5 月 1 日に長崎経由佐世保着、4 日には大本営が置かれた京都に着き、それからは漢口樂善堂以

来の親友中西正樹と連日顔を合わせている。6日「樺山氏一行と再び台湾受取に赴くべきの内命あり」、参謀部の依頼で「台湾人民に諭すの文を作」っており、7、8日には荒尾精に会っている。

次に「台湾従軍日記」を見ると、出発前の5月13日に「天皇陛下台湾人民に諭し玉ふの詔勅文を漢訳」し「實に無上の榮也」と感じている。出発したのは21日で、福島安正、安原等に中西を加えたメンバーで先発隊として宇品から長崎経由25日に淡水港に入った。しかし「陸上の清兵一斉射撃を為す三回」により、上陸を中止した。26日になると巡撫唐景崧が廈門に脱出したので、「台湾主権者去るを以て台湾は本日十二時を以て十二発の祝砲を放ち、青色の虎旗を樹て独立共和国の発表を為せり。是を以て内部の人心掏々頗る我軍に抵抗の状あり」とする。そして以後の日記には、時折日本軍との激しい銃撃戦があったことをうかがわせる記述があり、日本軍の被害には触れずに清国兵士の戦死については何度か触れているのである。

初め基隆に総督府が置かれている時は、そこで台湾統治に必要な文書類の作成に従事し、6月6日に樺山総督が上陸した頃には総督及び知事の告示文を準備して11日には書き上げている。また、14日には総督一行と共に汽車で台北に着いて、基隆から移した総督府に入り、17日に挙行された閱兵式にも出ているが、その日総督府で開いた中国人50人、西洋人20余人が参加した祝宴には、なぜか「不快で出席しなかった」と書く。中国人の抵抗が大方収まったと判断して台北における総督府の公式の統治が始まったということであろうが、7月13日の日記には台北近郊で「敵兵来襲し、この夜台北府城の警戒を厳にす」、8月9日にも「昨8日新竹の軍南進して尖華山の賊を掃ふ。軍艦秋津洲、高千穂又陸上の敵を牽制す」と書いている。その後台湾を離れて日本に向かうのは8月22日のことで、30日には京都に着き、31日に荒尾と会って「諸事を商量し」た。

## 澎湖島従軍日記

我海軍陸戦隊は六小隊にして、以三小隊為一中隊即二中隊也。人員二百四十人。

陸軍負傷死廿一人（内死一人）、海軍一人。

敵大約二百余。

三月廿三日 半陰。四時半起床。残月在天、涼風如水、雖有北風力甚微。六時有出港用意之命、満艦将士躍然欲試。六時十分第一遊高千穂、秋津、浪速抜錨先発、吉野為破損尚留此處。六時四十五分本隊出艦、進行順次第一浪速、秋津、高千穂、本隊松、橋、巖、運船西京、他船繼之。自八時天氣穩晴十余日來之所稀、遇天之幸、王師可謂厚矣。九時二十分自松艦以速射砲擊新順成号商船三発、第一遊擊。九時三十五分砲擊開始。十一時十五分前我艦投錨裏正角湾距岸二哩弱。十一時十五分松嶋卸小汽船上岸を始む。十一時半秋津又砲擊掩護上陸、敵兵放野砲妨上陸。十二時十分上陸、砲台軍艦兩軍開砲相応答。秋津、浪速、松嶋砲擊す、六千五百米突。下午一時半より我艦砲擊最烈、三十二珊、十二珊連発如雷砲煙蔽天、距離七千米。松嶋砲擊小休、他艦時々發砲するのみ。我松嶋備砲三十二珊放六彈命中甚好。二時陸兵至距砲台一哩之處自陸以信号停軍艦之砲擊、恐陸兵之損也。二時二十分陸軍前衛陸戦大隊上陸終るの信号あり。是より陸兵丘陵を亘り蟻集して大城砲台に迫るを見る。運船泊處より岸迄十二三町のみ。

仮船二隻來觀戰。

夜靜、篝火滿丘上。風死波不驚、星斗爛然。是夜始有遠征之情。今日始措身砲煙彈雨之間、能得知我之肝量平生快事為之第一。運送船有流疫死者不少云。明朝六時司令長官上陸、予亦受隨行之命。

三月廿四日 健晴、好天。二時半結束。午前五時半与伊東長官一行自本艦乗端艇上陸裏正角。

此朝三時半松嶋の陸戦隊六十余人上陸。我一行二十余名の衛兵を従へ七時半占領砲台に至る。我海陸

の兵砲台内外に充溢す。途中清兵死者十余名を見る。砲台内十五珊砲三門あり。昨日我艦隊より砲撃し、砲弾砲台に命中する者極て多し。午前馬公城の東方一里の高地より戦況を見る。十一時五分前我砲隊砲戦開始、馬公城より時々応砲、漁翁島西嶼砲台よりは巨砲を放て我軍艦を遙撃す。此日春色如海、雲雀声高（途中砲声を聞く）。我砲兵陣地は馬公城の東方に在り、陸兵城の北側兵営側より迫る。砲兵陣地より馬公城に至る二千五百米突。十一時十五分我陸兵公城北側兵営の上に登り旭旗を翻すを見る。二時四十分帰艦。聞く、馬公城も全く占領せりと。四時頃時々砲声を聞く。我馬公城の占領砲台と漁翁島との砲戦なりと云ふ。

三月廿五日 健晴、炎氣頗高。午前船転泊す。円頂山の敵は昨日降服せりと云ふ。午前参謀長からの依嘱により漁翁島（本名西嶼）西嶼砲台の守将に降服を勧むるの文を作る。

是日騎兵伝令使馬公城より到る。曰く、大城砲台の敗兵は我軍の方向に向て逆退せりと云ふ。

円頂湾の敵将澎湖定海衛隊營管帶郭潤馨部兵一千人、糧食二ヶ月分、兵器、弾薬を以て我海軍陸戦隊に向て降を乞ふ。晡時信号あり、曰く、漁翁島に敵兵無き者の如しと。蓋し昨日馬公城我占領に帰してより勢の為可からざるを見て昨夜小舟にて逃走せし者ならん。

三月廿六日 快晴。下午一時半裏正角湾を出艦し馬公湾外に至り、三時漁翁島前に達し下錨。三時艦隊参謀と漁翁島砲台兵営を見る。砲台題して西嶼東台と曰く、備砲三門あり、十珊一、八珊一、六珊一の安式なり。火薬庫に退却の時爆烈せしめたるなり。砲台兵営の内狼藉不忍見、實に醜を敵に示す者武門の大恥なり。下午英艦台灣より入り来る。

澎湖全島の総指揮官は記名提督宏宇前軍澎湖鎮総兵呉宏洛にして、漁翁島の総指揮官は管帶宏宇前副營兼管西嶼東西砲台副将銜補用參將劉忠樸にて、澎湖馬公城の大將は朱上洋たり。朱は自殺せりと云ふ。此他宏宇正前營管帶周扼邦なる者あり。

六時帰艦予輩の上陸するや、土民総代來り保護を哀求す。語言通ぜざるを以て仁義の師たることを書いて与ふ。是日金州丸日本に帰航。

○玉蜀黍、落花生、山芋、甘蔗、豕、牛、魚、乏しからず。水も亦た稍可なり。樹木なし。田野能く開く。大抵波状地なり。丘陵連絡す。

○百姓安堵朴野にして治め易し。

裏正角に面せし丘上野砲一門あり。

砲台

大城砲台（台門題曰、拱北台）、十時二門、七時一門、安式。

円頂港砲台、十五珊一門、全く落成せず。

西嶼東台、安式十二インチ一門、安式八インチ一門十時、安式六インチ一門十時。

西嶼西台、十二時一門、十時二門、七時一門。

馬公城内、安式五時砲一門。

馬公城金亀砲台、安式十二時一門、安式十時一門、安式七時一門。

外に、西台の側、光緒二年製前装砲三門、東台側同三門（口径六吋）。

三月廿七日 晴天。漁翁島砲台前に泊す。昨日より探海に従事す。是日漁翁島土民総代陳盛、吳塔、陳次等、寛大の恩を施し憐憫を垂れ窮民の流離の慘を救わんことを哀求す。我を称して大明國大元帥と云ふ。下午橋立号八罩山に至り吉野号を拖て來り、馬公湾に泊す。夜大霧。此地方多霧。我軍戦死者、水兵一人、陸兵一人、負傷數名、病死六十名。

三月廿八日 晴天。午後大風捲雨至狂瀾如山。聞く、円頂山の降兵は一千〇十八人なりと云ふ。晚寒冷又た夏衣を脱して綿衣を着く。季候の不順如此、最も心を摂食に用ひざる可からず。嚴島、倉島に赴く。

三月廿九日 陰天、冷氣甚。今日迄軍人軍夫の虎病に死する者百〇五人、患者三百余人。十一時十分独

逸国軍艦入来互放礼砲。下午三時半江戸丸入来。風濤高猛。

三月卅日 半晴、風強冷氣如昨〔日〕。下午郡の浦丸、病院船神戸丸、英仏両国軍艦各一隻入来る。劉公島堤真人の信を大本營より送り来る。今日迄患者総数七百人に上ると云ふ。

三月卅一日 晴。風浪穏。終日石炭を積む。仏船一隻及び我高千穂出港。倉島に赴〔き〕巖島の消息を探る。是日午時元山丸、土陽丸入港、有郵便来る。聞く、請和李鴻章馬閔着の後、去る廿四日狂人小山六一郎なる者の狙撃を受け、左眼下を傷けりと云ふ。是れ痛恨すべきなり。

四月一日 晴。午前八時英船二隻入港。下午三時半有栖川宮艦長殿下橋立艦に御転任あり。松嶋には橋立艦長日高莊之丞氏長たり。陸上の邦人病に罹る者、今日迄一千二百余人、死亡二百余人の多きに上る。林田中尉亦病む。通訳官一人病死せりと云ふ、未知其姓名。

民政府へ建議書を作る。今日迄の処患者〔は〕総員の五分の二、死者〔は〕病者の五分の一と云ふ。

四月二日 晴、熱八十五度。午前万国丸出口。下午野戰郵便にて新聞来る。是日小汽船にて支那船に至り查驗する二次。

四月三日 穏晴。明日下午千代丸出口、広島〔の〕三沢、白岩二氏並に家大人に致すの書状を投郵す。在馬公城林田に致書し、其の病状を慰問す。下午相模丸入口、水雷母艦なり。

四月四日 晴。朝来心氣不舒。第二軍第二分団田鍋、鳥居、岡田三子に發信す。下午玉姫丸入港。暮浪速、橋立出口、不知往何地。

四月五日 快晴。九時雨を衝き司令長官日高艦長、秋津洲艦長一行と上陸燈台に至る。境内清浄、繞郭有洋房一坐、曾有魯人及外に泊西人一名、日本婦人一名昨日帰長崎、刻下使支那人看管。見西嶼西砲台有砲四門。本日より各艦より十五人づゝを派遣し掃除に従事す。此の砲台の傍有光緒二年製之旧式五、六吋口径前装砲三門。去て西嶼東台に至る。未至砲台少許之処有小砲台、備光緒二年砲三門。一行踞砲用午食。煙雨霏々、海面如鏡。馬公城、円頂、大山等三十六島の風光集襟、下馬公城外我運船蔽海而泊。實に無双の良湾なり。背面又有一大良湾、可避南風。此の良湾可容數十隻之船。地形は平面高地にして、恰似我鈍摩原之高原。東砲台亦従事掃除、室内有支那人之死屍三具、腐爛臭氣撲鼻。二時帰艦。

内垵外垵、各人家三百、民家各伝写我軍之告示、帖之或自掲示門戸。曰、大日本國皇帝倡議討賊不害順民、從今三十六島永為日本屬邦云々。

松嶋三十二珊、砲弾一發の代八百円と言ふ。馬公城に蓄ふる砲弾一千余あり。水雷は四十個、内最新式二個。円頂湾に地雷三線を布設し有りたり。

四月六日 晴。午前浪速、橋立二艦従偵察地帰来。夜碧空如洗、明月一痕懸中天、三十六島影倒影于漣波中。風趣清越不可名状、如此風光又不可見。旗艦明朝出港の令あり、夜運船、入港。白岩より荒尾著及乙未会報告〔通告書〕を送り来る。

四月七日 晴天。午前七時出港、高千穂同行。東京丸山重俊の信到る。聞く、李鴻章は休戦の担保として大沽、山海關を我国に開付せりと云ふ。船の方向東偏北より東北に向て進む。海波穏静如航湖水。熱氣甚し。

四月八日 積陰微雨。午前十時半船過基隆之前山巒推列一島。当前為基隆島、煙雨濛々、船体動搖、暈氣頻催。

四月九日 晴天。風浪高甚。

四月十日 晴。風浪頗高。晩午琉球の諸島を望む。数日來心氣不舒。下午一時船那霸港に達す。四時十五分古嶋一雄及士官一同上陸、明治橋畔森田喜平次方に投す。

河口有奇岩峭立、上有燈台四顧之、山上樹林葱々〔蒼々〕新綠欲翠。土人家屋都瓦造略似澎湖土人之屋。男女高髻筒袖頗為奇看。道路坦々、腕車多皆土人挽之。五時那霸港西村寺田方に投す。晚古嶋と小酌し、上車出て土人の演劇を見、去て安駕なる者の処に至る。屋内似内地、飲焼酒（以下、保存が

悪く20字ほど判読不明), 十時月を踏て帰る。至海岸大月一痕, 涛声如雷, 風趣不可状。賦詩入寢。

四月十一日 晴天。春色如海。七時起床。古嶋と上車向首里。大道坦々如砥。両側山巒翠色欲滴, 間有奇岩, 当道青松列植, 風光不可名状。如此風景又不可多得。寿城皆穿崖造之。二里達玉城前。有門篇曰中山。又有一門, 題曰守礼之邦。城内有分遣隊駐之, 通刺往歎將校某來案内遍看門房。中嶋裁之之弟及野津致に会ふ。共に同県之人也。帰途龍潭の中城尚典氏の別邸を見る。邸前有溜池, 曰之龍潭。王之別邸外有二處, 一曰敷名御殿, 一曰(2字分空白)御殿。從城上望之有松林蔚鬱之間, 城内雖屬荒涼, 規模不小, 緑樹葱々〔蒼々〕, 風色如画, 位置丘上, 那霸中城海陸之全景尽集襟帶之下, 登臨之勝如此者所稀遇也。上車旧路に就き十時帰る。車錢往復十四, 五錢たり。此地物価廉甚, 人情又淳朴有礼, 甚為可愛。此是有軍艦歎迎会, 司令官以下赴之。此日寺嶋, 宇田, 大田, 錦織, 北村列, 及び家大人, 並に浅山, 山田二氏へ通信を送る。夜古嶋と市街を散歩し甜湯を食ひ, 海岸の新地に出て月に歩す。大月盆の如く, 涼風衣に満つ。清絶不可言, 高吟徘徊多時帰寓。十二時就寢。

四月十二日 晴。旅宿にて朝食を吃し, 九時帰艦。

四月十三日 晴天。午前十時那霸出艦。

四月十四日 雨天。下午三時半過八重山之前。煙雨迷濛, 分明不可望。

四月十五日 快晴。五時過台灣東岸, 相距甚近。有一高山聳立天半, 曰思利加山。拔海面一万二千六百尺, 為之台灣第一之高峰, 山形略似九江之廬山。山頂有電。比富士為高。偵察蘇澳灣折回左方有一島, 曰龜山島。十二時半基隆島前を過ぐ。當面の峰巒逶迤波走, 嵐翠欲滴。下午三時左舷望大屯嶺, 高三千尺。海上臨檢支那船。海波平穩, 是〔日〕寒暑表七十四度。

四月十六日 晴。海上穩靜。朝遙望台灣之西岸。下午三時半達漁翁島。近江丸及水雷艇六隻在焉。過日來着せし者なり。昨夜逢西京丸帰國, 今日途中又逢土陽丸帰航, 不具武装之運船而不用護衛。橫行敵海可謂壯也。陸上の兵士軍夫死者總計七百余人。近日病者大減少, 今日僅有三人云。是可喜也。

四月十七日 晴天, 熱氣甚。林田中尉本月九日死去, 可悲也。馬公湾中容船艦四五十隻。下午三時嚴嶋, 浪速, 秋津洲, 及水雷艇三隻向福州沿岸土港。

四月十八日 晴。午前八時与安原少佐乘十七号水雷艇至馬公城, 与田中少将, 河野主一郎他數子至八罩島。十一時十五分着, 上陸仙史宮に入る。綱塙橋西行, 人家百余戸, 曰花宅。長官一同投小廟, 招鄉老, 地保給安民帖, 中食。下午二時達水塙投水塙宮安撫人民如前。人戸百五十戸, 有小湾民數隻泊。四時半至倉島投所待之雷艇, 田中少將一行巡視倉島。五時十分倉島發六時二十分馬公着。長官一行上陸去。七時帰艦。夜十二時万国丸入港。

四月十九日 晴。午前英艦入港。十七日両國媾和成るを伝ふ, 未真否を知らす。

四月廿日 雨天。白岩之信到る。本月十日近衛附として出發せりと云ふ。大坂も出發, 大総督府も十三日に□□に進められたりと云ふ。

四月廿一日 陰天。冷氣又催。季候〔候〕之變如此, 害健康可知也。

四月廿二日 晴。午前十一時半浪速, 嶼, 秋三艦, 雷艇帰來。□明門司丸出口。

四月廿三日 晴。午前与安原氏赴馬公城, 共伊東中佐。九時四十分馬公着, 出東北門即朝陽門一覽二個兵營。我軍隊駐之枝隊本部在城内澎湖總鎮衛門。出門東北行十五町至西衛村, 訪長官宿處, 去至通訊官事務所。以廟充之。面松本等。西衛村在海湾之汀, 人戸百許。於民政府中食。一時就帰途す。次至馬公城鎮署之枝隊司令部, 面比志島大佐。鎮署規模広大。四時十分前帰艦。

四月廿四日 陰。下午二時以各艦之陸戰為仮設敵演習, 一為敵兵守漁翁島西砲台, 一即陸戰隊及陸軍以端艇上岸, 終攻陸上之敵略取砲台, 敵立白旗乞降。晚食後告別長官, 艦長以下之知人。晚於上長官与各將校話別。七時前与安原少佐乘小汽船移海軍運船玉姫丸占坐上等室。

四月廿五日 積陰, 北風大。午前七時十五分松嶋, 橋立, 高千穂及水雷艇三隻出港至福州, 廈門地方。九時半移泊馬公湾。午前なら丸入口, 聞馬閔媾於十七日偽條約成, 更継続二十一日間之休戰。天候不

良、松嶋以下之艦船帰來。船客敦倫タイムス、ガゼット両新聞通信員其訳官二人。

四月廿六日 陰、北風大。午前六時十五分ショウチ湾を抜錨す。夜十一時邂逅、西京丸赴澎湖。

四月廿七日 晴。風浪靜穩。

四月廿八日 晴天。午前海上見外國軍艦一隻。下午以軍銃戯射海鷗。夜与通訳官竹井耕一郎談、法科大学生也。

四月廿九日 晴天。下午三時右舷望甑島。下午九時三十分入福田港口、翠鬢を模糊の中に認む。三更漁人來壳魚。大鱗小鱗瀲々有声直命包人、鮮之熟之食之、味之美殆蘇人。十二時入寢。

四月三十日 雨天。六時出福田湾向長崎港口、為検疫也。六時半入長崎港。春雨濛々、両側之山經新雨翠嵐欲滴。午前至女神之検疫所投上等室。改衣入浴場、浴場一人給一室。出浴又改衣、至山上之洋房出珈琲及洋煙、待遇懇切。一時帰船。

発信長崎鈴木及家大人。此他松嶋乗組員より托されし書状も発す。山田珠一、浅山知定に発信す。長崎港内碇泊。

五月一日 雨。午前六時長崎出口。十一時佐世保着。昼食後上陸。煙雨濛々、港内有捕獲船益生号。一時投佐世保町河原田方。明日を以て京都大本營に向はむとす。荒尾精、西村忠一に発信。夜山田大尉來談。

五月二日 微雨天。午前九時十五分出佐世保之河原客店。十一時過早岐、山間之一市集也。一時半過新村、二時入有田駅。本日之一路溪山之景甚佳絶。投伊勢屋中餐。三時十分出發從佐世保到此六里、早岐為其中間、過立野川、中通等之小村。五時十分入武雄村、從有田到此三里、村有一奇山分両峯、曰城山、松樹蓬生風致甚佳。街中道路三叉、一支治電線。過奇山之麓投温泉場側之三国屋、浴室來山下之藥師温泉之特別上等室、劃一泓為一室、玲瓏照鬚眉。浴後憩階上之清室啜茗。庭前有小池仮山之景頗好。躑躅花盛開。嵐翠入衣襟清爽蘇人。両腋生風栩々然自適、旅中之一快之為第一也。入夜春雨瀟々、四隣歌管如湧。亦山間之小揚州也。

五月三日 雨天。午前三時廿分上車發三国屋客棧。降雨。過小田駅一面平坦、恰上海地方之景致。過牛津、久保田等之諸訛〔駅〕、三時十分前入佐賀市、過八戸、長瀬、多布施、唐人町等之諸街到停車場坐中等室。八時卅五分開車至鳥栖換坐。下午二時達門司投古賀文。下午三時紫藤來。九時投三児丸転別室、以紫藤氏之周旋待遇甚好。

五月四日 晴。過峠中、風色依旧好。十二時前達尾の道、上陸投濱吉支店。下午一時二十五分發車、過福山到金光駅、降雹如丸。過岡山、和氣等之各駅出三石、有第二之隧道甚長。晡時過姫路有城、城市甚都麗。夕陽至赤石、左方一城在老松鬱々之間。是亦好城市也。又經須磨、舞子、青松白沙風景似的飽得看一谷鶴越之景。七時十（1字分空き）達神戸換坐汽車、十一時半到京都、投木屋町金波樓面鈴木副官及伊集院大佐。

五月五日 晴。朝移転河原町元織殿方、白須氏在焉。午前出訪川畑良之介、去訪尾本寿太郎、共出至東山、尋祇園、清水、音羽等之諸勝。風光明媚深綠鬱々、清爽蘇人。上清水茶樓小休、下山投祇園町洋食店中餐、渡三条橋帰尾本氏寓途中逢古莊嘉門翁、与尾本出訪古莊翁及古莊韜于共樂館小談。下午古莊到訪。晚訪尾本、長谷川氏共飲。中西正樹自大坂帰來互叙久闊。同人以病從戰地帰京者、剪燭快談、深更宿中西處。是日午後川畑來訪。

五月六日 雨。朝帰寓。出訪佐々、古莊両氏。佐々氏未來京、古莊赴大坂。予も樺山氏一行と再び台灣受配に赴くべき内命あり。来る九日此地發、宇品にて旅順を経て南方に向ふと云ふ。是日台灣人民に諭すの文を作る。參謀部の囑に応ずるなり。下午中西と鶴を割て飲む。夜尾本来会、八時帰寓。

五月七日 晴天。朝出て安原氏を訪ひ旅費の決算を為し、上車鹿谷に至り、訪荒尾精之山居小飲談論、至下午辭帰。晡中西、尾本来共に飲む。夜尾本と散歩投四条橋畔旗亭飲、十二時帰。

五月八日 晴。朝荒尾之弟子二人來訪。晌午荒尾氏來談。下午訪中西共出敲佐々友房氏不在、去至古莊

翁亦不在。帰中西処洗浴帰寓。発信家大人及紫藤猛氏。

五月九日 陰天。

## 台灣從軍日記

廿八年

五月九日 晴。家大人並に大津〔の〕猪飼麻次郎に発信。下午中西來，共出誘尾本至祇園町洋食店晚食，去一覽円山知恩院等。帰中西処談話，十一時帰寓。是日訪佐々友房小談，〔佐々〕今夕赴大坂。寄猪飼子詩。

万里南征載筆回，江州風物想追陪，石山明月唐崎雨，定上先生詩卷來

五月十日 雨天。晚中西を訪ひ尾本等と快談，終に宿す。松嶋艦準士官に発信。

五月十一日 微雨。昼食後中西寓より帰る。晚錦織氏と四条橋側に至り饅飯を食ひ，帰途佐々友房氏を繩手三条下る小川てい方に訪ぶ。荒尾精，陸實來会，十一時帰寓。

是日有詩

紛々世事亂如絲，短劍來休鴨水涯，好我征心急於矢，台南風露沾荔枝

再用前韻

煙雨沾城細於絲，吟魂偏在鴨之涯，嵐山花落春何處，鶯夢尚殘新樹枝

五月十二日 晴天。午前中西，尾本，白須，小笠原諸氏と撮影。中西と出て至古莊嘉門氏，以病在床。去散歩東山，帰途至四条之饅飯。去訪佐々氏不在，面陸實寃談久之而帰。古島一雄亦帰来，軍艦松嶋より帰りし者なり。帰中西之寓。佐々友房氏の信到る。帰りて上車至古莊氏談話，不用品を山口武洪氏に預り，六時与古莊韜上車祇園鳥居元酒店，列同県人親睦会。安場翁，藤嶋正健，佐々友房，高橋長秋，徳永市十郎，村上景沖，神江原治，中村義雄，水上浩基，外二十余人。八時半与古莊同車共樂館に帰り，前田某と談じ，九時中西の処に抵り洗浴後帰る。

五月十三日 晴天。朝金波樓に至り，我

天皇陛下台灣人民に諭し玉ふの詔勅文を漢訳す。草沢之書生筆を執りて鳳音を写し，之を蛮貊に伝ふ，寔に無上の榮也。伊集院大佐と水野書記官を訪ひ勅文の事を照量して帰る。下午三時与中西出乗火車至大津，訪猪飼麻次郎氏小談。賃人車過膳所城下至石山，投柳屋。人屋十数戸負山臨琵琶湖。石山寺在街上，風趣佳絶。夜割琵琶之鮮飲酒，快絶不可言。湖山之風色在一目中。夜水蛾千万撲窓紙，声如急雨。自膳所至石山路，右有今井兼平之墓，即同人戦死之處。勢田長橋近新修。是日伊東弁理大臣終條約之交換帰京。

五月十四日 晴。於柳屋朝食。八時上車至大津賃一舟下疏水。於三井寺下解纜入隧道，長二十四町，出之為山科之安朱橋。両岸之風色清趣邃遠躡躅満山甚為佳觀。又過水孔二道，一長八町，一二町。十時半達京都疏水長二里八町。正午佐々友房氏來訪，下午約再会而別，中西の処に至る。五時上車至熊野神社，森升会安場保和翁，古莊嘉門，佐々友房，沢村大八氏等飲快談，至八時而散。予與佐々氏訪荒尾精若王子之隱居，不在。帰佐々氏寓割鶏而飲。此夜十時佐々氏帰東京。

五月十五日 晴。終日在金波樓弁事務。夜訪中西談。

五月十六日 晴。午前至大本營，以明日出發經広島向台灣收領旅費。帰中西処中食。中嶋真雄從広島來，田中善助亦來訪。夜訪中西与中嶋等談，終宿。

五月十七日 雨。下午四時半与中西，尾本，中嶋至七条停車場上車發京都。中嶋至大津省親。八時半至神戸，投山村屋宿。

五月十八日 陰。午前九時上汽車發神戸，飽看須磨，赤〔明〕石，舞子，姫路等，山陽之風光。下午六時達広島投元柳町佐々木寿七郎方。夜与中西出訪尾本小談帰。

五月十九日 朝雨，午晴。朝出訪古莊氏于山口宅小談帰。晚与尾本，中西至山文船亭吃飯。夜古莊韜來談。此夜夢隨素盞尊遊四川省成都都賞江山之景。

五月廿日 陰。家大人並に山田珠一に發信。午前古島一雄，尾本寿太郎，小川真一等來談。下午有急命，福嶋安正，安原，嶋村久，中西及び予は明朝急に此地を發し軍艦にて台灣に先發することとなれり。夜古莊，山口等を訪ひ別を叙す。

五月廿一日 雨天。午前八時結束，与中西上車至明輝樓。与安原，福嶋大佐，嶋村諸氏連車至宇品投八重山艦。十一時開船。

五月廿二日 陰。午前七時達長崎転乘浪速艦，入准士官室。午前十一時与中西上陸長崎投土佐屋，招鈴木行雄而飲。下午四時帰浪速艦。六時出口，風波平穩。

五月廿三日 晴。無事，風波穩。夜至吉岡少尉談。

五月廿四日 晴。無事。夜至士官室，因士官諸氏之求為支那談。小松大尉，宮殿下亦下問あり。

五月廿五日 雨天。午前九時十五分入淡水港内，高千穂も同じく碇泊。十時過自両艦上陸陸戰隊三小隊之予定なりしも，暫く之を中止し人を派して先づ在淡水河至英國小兵船陸上の動靜を探聞せしむ。帰途高千穂之小汽船に向け陸上の清兵一齊射擊を為す三回，予，福島，安原二氏と中食後上陸の筈にて結束せしが，俄かに中止となる。晚景高千穂出口鷄籠に至り偵察す。

五月廿六日 雨天，細雨霏々。淡水港碇泊。滿目江山積翠欲滴。下午艦員英國商船に至り陸上の動靜を探聞す。帰報曰，巡撫唐景崧本日十二時乘英船向廈門，台灣主權者去るを以て本日十二時を以て十二發の祝砲を放ち青色の虎旗を樹て独立共和国の発表を為せり。是を以て内部の人心渦々，頗る我軍に抵抗の状ありと云ふ。嗟々逡巡，遲疑空失時會，庸人計國往々如此，可痛嘆也。晡時高千穂從鷄籠帰。

五月廿七日 晴，晚雨。午前高千穂艦向琉球中城湾。

五月廿八日 晴，風大。午前七時松嶋艦入港。夜九時橫浜丸入港，總督一行從此船來。

五月廿九日 陰。午前三時与我一行移乘橫浜丸，尾本等在焉。瀧川，柴以下亦在。午前五時拔錨淡水，與松嶋，浪速向三貂角湾途中會從中城來近衛運船九隻。下午一時達三貂角湾。二時四十分第一回兵已上陸，三時前十分敵兵少許自海邊山腹之樹林射擊我兵，少時而遁。敵兵死四人云。

五月卅日 陰。是日下午中西，尾本等与憲兵隊上陸向基隆。自旅順來中村雄介，岡田兼次郎，岩崎，森等來船。夜從事戰利書類翻訳。

巡撫唐景崧，

記名提督台灣基隆砲台銘字，定海，連勝等營統領張兆連

連勝營統帶曾喜照

右三名は今回台灣防務の重寄に任じ居る者にして，張提督殆ど之が全權を握れり。

三貂湾付近，金似石，大小粗坑，右両地金沙局有り，兵勇十二棚を屯す。土人洗金沙為業者多し。

五月卅一日 雨。自運送移來之通訳官統々來訪。下午五時与安原少佐出橫浜丸上陸，投近衛司令部在一茅屋中。民屋点々名塩藪。司令部中平野六郎，香月，河野久，河本諸氏在焉。夜与平野，河本乘月出海岸談。陰月朦朧，篝火滿万岳，馬嘶遠聽，實軍營光景也。深更舍營に宿す。

六月一日 陰。早起糧食を受取。八時与近衛司令部共發塩藪村。七時二十分也向南々西進道路，入山崎嶇甚，兵士為一列而進。八時二十分出溪流之處，沿流向西進。自此方向西南及正西也。九時至溪流之處小休二十分又發向西北而進。沿道溪流清冽可掬，山亦箐篠茂生。下午一時達頂。双溪人戶七八十戶。師團之兵駐此，會中西，荒賀，大屋等宿双溪。雨。

六月二日 雨。午前六時越山度溪嶮惡甚。八時向北越大嶺，樹林葱茂。八時四十分在頂山休。十時達三貂嶺頂上，眼下為鷄籠。眼下山下小銃にて戰ふを見る。敵依山我依村落，互隔水田。十一時下三貂嶺。十二時達麓下。此より北行，沿道淘洗金沙為業多，路右一山為金山。四時入瑞芳村。村口有敵兵死屍。今朝之戰敵死者三四十名云。距基隆廿二里，此地に前田彪，荒賀直順，大屋半一，松倉善家等

之旧知在焉。快談至深更就寢。

六月三日 晴，朝頗涼。六時廿分与松倉，平野氏等發瑞芳。隨先頭隊越山度溪屈曲迂回，与松倉氏共至司令部屯集地，眼下望鶴籠市街。基隆砲台開巨砲打我軍艦。晌午我軍分三道而進。左右翼者索探兵而進。中央三本道者為本隊，初与松氏從右翼隊偵察山中，後下山合本隊。午時於山中逢大雨衣帽皆沾。下午一時与本隊先頭兵向基隆街。街口右側之深林中有敵打我一行。相距五六十米我輩無地物之可依即就田畦与之應戰。敵後方之山上及基隆街上より放砲打我屯集地，甚急飛丸跌頭上轟々有聲。下午二時突□入基隆市，敵兵潰走。松倉入右側山上向海浜去，予入城內至街之西端見攻西岸砲台，大小銃丸如雨集。入一小屋焚火干衣。山上敵兵抵抗甚力。下午四時四十五分我軍終援之。予往看地形險固無比，實金城湯池也。敵之屍沿道及山上に散乱す。晚至旅團司令部投松倉之廻啜粥，深更就寢。湿衣就寢冷氣不可眠（与松氏山中逢雨時右側隔山砲声大作）。

六月四日 晴。於旅團司令部朝食，与松倉氏散步市街至司令部，投通訳官廻中食。下午司令部移転海岸之稅關趾之洋房，予亦往。我艦隊碇泊港口此廻，沿海之風色甚佳也。是日先發隊向台北方面。

六月五日 晴。午前予移基隆廈跡台灣總督府内。下午荒賀，松倉，古嶋等來談。總督部各員是日上陸來投。台北官舎を焼き敵逃走せりと云ふ。

六月六日 晴。午前出基隆廈又移稅關趾。是日下午樺山總督上陸。

六月七日 陰 下午至總督〔府〕為翻訳。夜吐瀉三回。

六月八日 雨。午前中西，荒賀，前田等來訪。三時与尾本，前田，中西至基隆廈，舟中逢大雨衣袂尽沾。晚於中西廻割鶏而飲。八時与前田共帰。

六月九日 晴。午前古嶋來訪。是日中西，平野諸〔氏〕向台北先發。夜雨。至總督府作告示文。

六月十日 晴。朝師團司令部向台北。午前移總督府与前田，岡田，安樂等住幕舎。是日發信家大人。是日有詩，

漂泊江湖二十秋，半生歲月付東流，中原電掃未成志，誤落台南斗六州

又

北馬南船幾經秋，赤心久擬回橫流，班生未擲傭書筆，辜負中原百二州

六月十一日 晴。總督及知事の告示文を作る。晚食後与前田，岡田，安樂諸氏散步基隆市街。

六月十二日 晴。松倉從台北來。鳥居東京より，林田熊本よりの信到る。是日托有馬送荷物于台北。晚食後散步于基隆市。

六月十三日 晴。松倉帰台北。

六月十四日 晴。午前沢村來訪。十二時至停車場上火車。一時十分前開車，樺山大將以下六十余人一時二十分至七堵，茅屋二十戶。三時過到水返却（脚），人家数百戶之盛地也。汽車到此損汽罐不可行，因与前田，岡田陸行。降雨霏，沿鐵道線路行。稻田蒼々，既吐秋田野能開，兩側之山翠欲滴，寃天賦之地也。至距錫口六里之地，乘總督一行之汽車到。因又乘之，六時半達台北府城北門外停車場。師團長殿下以下支那人等迎者如山。直入北門投總督府，會荒賀，尾本，松倉諸氏。

六月十五日 晴。午前与前田，荒賀，松倉氏等遊大稻埕居留地，晡時帰る。人煙稠密之地也。

台北府城係劉銘伝之新修為方形穿四門，街路寬闊，布以石城，位置平野之間，帶淡水河遠繞山，規模宏大隱然巨鎮也。至此見劉氏之為一世之雄也。

六月十六日 晴。午後總兵余清勝來，大島少將，水野遵氏以下會之，予亦列席，同人帶五營之兵屯大嵙崁者也。晚与岡田，平野諸氏至城外，歸途投面舖晚食而帰。

六月十七日 晴。是日午後於市中為閱兵式樺山氏臨之。下午三時於總督府內有祝宴，支那人五十人西人二十余人及我海陸軍士官會焉。予亦係接待員而以不快此宴不臨焉。晚割鶏會食。

六月十八日 晴。午前至台北縣署，面松本，河野主等之諸氏，又晤前宜蘭縣知縣陳某。下午陳來訪。夜与大屋，沢村，荒賀，前田諸〔氏〕至居留地六館街飯店會飲，至淡水河畔散步帰。

六月十九日 晴。佐野直記等之信到。是日發書招林田道利、徳田弘策、熊谷、高橋、景山、大内以下之人補通訳官欠也。晚与荒賀、前田、松倉、沢村、大屋、岡田等至六館街飯店晚食。帰途散歩江干帰。平川常義來。

六月廿日 晴天。是朝荒賀直順、岡田兼次郎、古莊韜等向新竹県而去。晚与沢村、大屋二氏至大稻埕六館飯舗飲、夜帰。

六月廿一日 晴。下午至台北県小談。夜与前田、沢村、大屋、松倉、尾本等至艤舡協記酒館飲。

六月廿二日 晴。午前平川常義從淡水帰來訪、晌午与平川、大屋二氏至六館街會食。下午津田靜一氏從基隆來、作与在台南劉永福勸降之書為總督也。夜与尾本、沢村、木村信二、古嶋一雄、前田、大屋、外山、松倉等至艤舡會食、十一時帰。

六月廿三日 晴天。下午県庁に至り弁事。五時与津田靜一、古莊嘉門、松倉三氏乘小汽船、六時二十分至淡水面福島大佐及中西等。夜与中西談深更就寢。

六月廿四日 晴。午前散歩滬尾。下午二時乗汽船帰台北。

六月廿五日 微雨。下午与安樂、松倉至六館街飯店晚食。

六月廿六日 雨。晚与松倉、安樂、平野至艤舡協記會食、森、大屋、沢村、尾本等亦來。

六月廿七日 雨。終日在寓。去年今日發漢口。

六月廿八日 晴。是朝尾本赴澎湖、台南行諸氏亦發程。發信京都荒尾精。是日台灣人民軍事犯処分令を訳す。

六月廿九日 晴天。田鍋安之助、井手三郎に發信す。

六月卅日 晴。

七月一日 晴。与前田氏等散歩大稻埕。

七月二日 晴。与前田、大屋、森等至艤舡晚食。松島艦児島之信到。

七月三日 晴。松倉等自基隆來。近衛第二旅團自陸路以向台南也。

七月四日 晴。

七月五日 微雨。鳥居に致すの書を作り、平野六郎の帰國に托す。下午中西正樹自淡水來、夜留宿。去年是日着芝罘。

七月六日 晴天。

七月七日 晴。高原哲太郎來訪。晚与前田、松倉、高原至艤舡協記晚食。夜高原宿我舎。市川徹弥來着。

七月八日 晴。下午高原帰去す。家大人之信到、光彦之病氣迫危篤不堪憂傷之至。田鍋安之助之信自京都至、直復信。

七月九日 雨天。去年今日入威海衛。岡次郎君從基隆來。古莊韜來訪。

七月十日 微雨。午前中嶋真雄從淡水至。下午五時与松倉、中島至協記飯店會食。基隆古莊嘉門氏に致書、中島、荒賀、高橋三氏の事を托す。

七月十一日 陰天。發信家大人、光彦及山田珠一。山田には家君に金十五円を送らんことを托す。

咏劉永福

休按名分論俊傑、孤忠獨見田橫賢、知君豪氣依然在、苦守台南半壁天

七月十二日 晴。下午与中嶋真雄、前田、井深と艤舡に至り会食す、是日井深仲卿來着。荒尾精の信あり。家大人の信又來。

七月十三日 雨天。下午病院に至り沼田生の病を見る。五時十分終に死す。年二十歳、可惜也。是日於一二里之處敵兵來襲。此夜台北府城の警戒を嚴にす。

七月十四日 晴天。無事。

七月十五日 晴天。古莊嘉門翁の信到る。佐野直喜、林田道利、徳田廣作之信又至。三氏予之所招両三日來基〔隆〕者也。復信古莊氏以下。

七月十六日 晴天。

七月十七日 晴。晚与前田，中嶋，川畑，井深，旭谷等至艤舡晩食。

七月十八日 晴。八時於南門外斬土匪二名往看。午時松倉自戰地帰來，屠大嶽，龍潭坡銅鑼縣殺戮甚多云。夜去山田大尉，瀧川少佐談。

七月十九日 晴。

七月廿日 晴。午前九時松倉義家赴戰地。晚与安原，瀧川両少佐至艤舡飲，八時帰。

七月廿一日 晴。竹田賢三之信到。是（1字分空き）勅使中村大佐来看

七月廿二日 晴。無事。

七月廿三日 晴。夜角田大佐，瀧川，安原，斎藤両少佐，松本大尉等と艤舡協記に至り飲む。九時帰る。

七月廿四日 晴。無事。

七月廿五日 晴。午前佐々澄治氏他一人來訪。甲斐一彦來告別，以病明日帰朝。夜与前田，大屋散歩，帰途投茶館吃茶。

七月廿六日 晴。午前八時至東門外見土匪斬，都八人。晚与川畑，大屋散歩。東門内空地涼味甚可人。

七月廿七日 晴，午前家大人並松倉親敬之信到。是日勝木恒喜来看。

七月廿八日 晴。小池信美，太田原，富永，香月等來訪。夜与中嶋真雄散歩東門内。

七月廿九日 雷雨甚猛。

七月卅日 晴天。武田賢三，松倉親敬，家大人に發信す。

七月卅一日 晴。

八月一日 晴。草場，岡田晋，景山，井原等來着。此日荒尾，田鍋，白岩に發信す。

八月二日 無事。

八月三日 無事。

八月四日 晴。晚与沢村，大屋至大稻埕東薈酒樓晩食。暮時浮舟于淡水河之中流。是夜陰曆望前一日，大月如盆，涼颸滿襟，両岸虫声知秋意。

憶起去年今日余在煙台，我領事館及居留民一同就帰途。余独托身于敵地，晦踪跡探軍情，幾出入死生之途。當時何料有今日哉。況当此夕泛舟于淡水觀月聽虫乎。僅に一年之間形勢一変使人不堪今昔之感。九時帰る。山内嵒在り，今夕來着せりと云ふ。夜談十二時に至りて寝に就く。

八月五日 晴。晚与中嶋真雄，山内嵒，草場，大屋等至大稻埕晩食而帰。

八月六日 雷雨。佐野，徳田基隆よりの信到る。

八月七日 晴天。

八月八日 晴。晚与前田，井深，中嶋，大屋至艤舡晩食。

八月九日 雨。夕橋本齋次郎來訪，即桂齋一にして，与予相識于漢口自小倉送人夫七百人到此地者，共飲。昨八日新竹之軍南進尖筆山の賊を掃ふ。軍艦秋津洲，高千穂又奉制陸上之敵。

八月十日 晴。是日江口音三の帰国に托し，佐々友房，高橋謙，鈴木行雄，古荘嘉門諸氏に發信す。夜山内嵒を県署に訪ぶ。

八月十一日 雨。安楽平治，三池親信來訪。晚井深，前田，三池，安楽と艤舡に到り会食す。

八月十二日 雨天。晚与前田至県庁訪山内，安楽，散歩而帰。

八月十三日 小雨。晚与角田大佐，安楽少佐，瀧川少佐，松本大尉外四人至艤舡協記晩食，九時帰。

八月十四日 晴。午前伊地知季綱來訪，從工兵第二中隊赴新竹者也。下午与同人上街吃洋食。四時伊地知向海山口去。

八月十五日 晴天。

八月十六日 晴。夜与中嶋，山内，大屋散歩。

八月十七日 晴。是日家大人之信到，曰光彦七月廿六日午前五時終死去，不堪悲。

八月十八日 晴。下午与前田，艸場乘小汽船至淡水，訪中西于民政厅宿。

八月十九日 晴。八時發淡水，十時台北着。与前田，艸場投酒樓中食而帰。

明朝五時發帰國の事に決す。県庁に至り田中少将，山内，松本，安樂等を訪ひ別れを叙す。夜山内，安樂，景山，岡田，鐘江，林田，艸場，中嶋，樋口，茂木等來訪，送別。十時赴海軍局之招飲。十二時半就寝。

八月廿日 雨天。午前四時起床結束，至停車場上車，井深，前田，中島，大屋，岡〔田〕來送。五時五十分發車。八時達基隆投台南県宿舎，与佐野以下諸氏会面古莊嘉門，同韜氏。

八月廿一日 晴雨無常。午飯後別古莊翁以下佐野等諸氏，与安原少佐乗京都丸。風濤甚猛不能出口。

八月廿二日 半晴。夜來之風未息。下午五時出口。風濤險惡船体搖動。晚食後暈氣頻催。

八月廿三日 晴。風浪尚猛。

八月廿四日 晴。風暴。

八月廿五日 晴。風狂。

八月廿六日 晴。海上漸穩。転予定之航路回日県灘出佐賀閥，正午望薩海之諸島，下午望海門〔開聞〕岳于左舷之天半過屋久島之側，海波平靜。五時過海門岳前望鹿兒島灣海岳崎湾口与硫黃島相對。硫島噴煙不絕，兀立海中甚為奇看，左舷見燈台。

八月廿七日 穏晴。四國豐後之間風光頗佳。下午三時半過佐賀閥在左舷，伊予佐田岬斗出在右。此間甚狹約四五千米，入中國海最要之閥門。

八月廿八日 晴。九時船達似島，上岸受檢疫入浴。十二時坐船入宇品，從此上車。二時達廣島投元柳町佐々木方，發書招山口武洪，山澤幾太郎二氏，晚到共飲。是日四時台灣知人所托之書信を附郵し，別に井手，荒尾，鳥居，山田珠一，緒方及び家大人に發信帰着を報ず。

八月廿九日 晴。是日上海速水一孔に發信す。下午山口武洪氏を訪ひ荷物を受取り，帰りて行李を整理し，再び荷物一個と刀一本を山口氏に預く。木原百製姿に發信，其兄実義俸給受取の件を前田に依頼し帰りしを報ず。晚微雨，八時廣島發。

八月卅日 晴。午前須磨，明石を経て九時半神戸着。十時廿五分同地にて転乗，下午一時京都着，二時三条小川てい方に投じ，直に東して田鍋，白岩両友を招き，且つ荒尾に來着を報ず。夜田，白二氏と鴨水之上索月而飲。大川愛次郎來着，本日來者也。

想起，去年今日予從芝罘逃難而入上海吳淞之一厄亦幸免以身投田鍋安之助。今日我從南洋帰來於此山明水秀之鄉會田鍋遇合又甚奇，快飲十二時に至り諸子去。

八月卅一日 晴。朝大川來共出訪田鍋，白岩，相携而訪荒尾精之山居。中嶋裁之及清童姜恒甲來訪。姜姓今年十三歲，係盛京復州人，助向野堅一者，風采之秀資稟之美足期他年之玉成。姜今所中嶋子之覆育也。於若王子瀑布之下飲。夜荒尾等と諸事を商量し，十一時月を踏で帰る。

九月一日 陰。午前田鍋，白岩來訪。